

『三葉集』

田漢・宗白華・郭沫若著

「田漢より郭沫若への手紙 その1－2 & 3 (上)」

(原題：「田漢致郭沫若」)

顧 文*

岩佐 昌璋**

Kleebatt by Tian Han, Zong Baihua & Guo Moruo

Letters to Guo Moruo from Tian Han No. 1－2 & 3 (1)

With Annotation

by

GU Wen, IWASA Masaaki

(Received: October 31, 2017)

その1

沫若先生：

今朝、食事の最中に、宗白華兄の手紙を受け取りましたが、『時事新報』のコラム「学灯」が何枚か入っていました。彼とはしばらく連絡していなかったのですが、この宝物を得て、ここ数日の寂しさを消すことができ、もう嬉しくてたまりません。彼は手紙の中でこんなことを書いていました。自分には最近一つ大変嬉しい事があって、無限の煩悩を減らしてくれ、また大いなる慰めを与えてくれた。それは、ほかでもなく僕【田漢をさす。】の同類のような友——「アジアの未来の詩人」郭沫若を得たことだ！——彼の手紙にはこう書いてありましたが、僕がいったい先生のような人と同じであるかどうかまた別の問題であります。さらに彼はこう言っています。自分はすでに郭沫若に手紙を書き、僕を紹介し、僕と連絡して、詩友になるように言ったと。そして僕に、もう連絡があったか、と聞いてきました。さらに、あなたの最近の長

詩一首と詩についての長い手紙も僕に読むようにと同封してありました。これらを読んだら、あなたの人間性と詩才を知ることができるのです。なお、彼があなたに返信した手紙も僕に見せてくれました【補注1】。

沫若先生！もし先にあなたの長詩を拝読していたら、すぐでもあなたと友人となる約束を結びたいと思ったでしょう。——たとえ、あなたが僕のような愚かな者と交わりたくないとしても——まして白華兄からこんなに有難いご紹介を頂いたのですから。僕は本当に嬉しいです！本当に幸せです！僕が付き合っている友人たちには、天真爛漫で、思想が優れ、才能に恵まれた人が本当に多いです。今日はまたもう一人の友——「アジア未来の詩人」郭沫若を得ました。どうしてもっと早く逢えなかったかと恨みたいほどです！どんなに嬉しく、どんなに幸せなことでしょう！僕ももう少しお話ししましょう。易梅園先生は僕の「心を許せる叔父」です¹。易淑瑜女史は僕の「心を許せる

* 東海大学経営学部観光ビジネス学科教授

** 九州大学名誉教授 日本郭沫若研究会会長

¹ 易梅園（1882－1920）、字は象で、湖南長沙の人。南社詩人。早年辛亥革命に参加 1920 年に長沙で軍閥によって殺害された。

伴侶」です。そして特に紹介したいのは、「意志堅固で、学識が広く、苦難に面しても挫けることなく進む」易克勤夫人、即ち僕の母です【補注2】。僕という「弱点の塊」、「無知で幼稚な心の持ち主」がこのような百花の咲き乱れる楽園の中で保護されているからこそ、再生する希望が芽生え、生きる意義と価値を大いに持てるのです。

あなたが白華に出した長い手紙を読みました。その分析は本当に深く鋭いです。あなたのこの詩論があれば、僕はあの数万字の『詩人と労働問題』【詩人と労働問題】を作らなくてもよかったのだと思いました。【補注3】

僕が最も好きなのは誠実な人です、「一誠以て万悪を救うべし」という語には絶対の真理があると深く信じています。誠の一文字は、新しい倫理であれ、旧倫理であれ、すべて不可欠な基本の要素です。従来人倫上の関係の現象を見ていると、大半は朝【朝廷】が野【民間】を欺き、父が子を欺き、夫が妻を欺き、兄弟が兄弟を欺き、友達が友達を欺いています。そしてその民、その子、その妻、その弟、その友は、また転じてその関係者たちを欺き、他人と自分が互いに欺きあい、世界には一事も真実がないのではないかとほとんど不信を抱かせるほどです。譬えば、今の何らかの新運動、新人物とかという者には、正体不明なところが大いにあり

ます。人に中国は未だ簡単には樂觀できないと感じさせます。新人物の中には、軽はずみで騒騒しい人が多く、誠実な人は少ないです。だから真に信頼できる人が本当に少ないです。また今の知識界の風潮では、人を安易に称賛すぎます。龐士元の「十中得一」【十の中（うち）、一を得る】の考えは、良くないわけではありません¹。しかし、堅く自分を騙し、人も騙ます者が多いのは、却って最大の弊害です。思えば、黄日葵兄とのつきあいが²、馬鶴天先生の紹介によって始まる時に³、彼が南京の旅先からの手紙の中で、僕を「模範少年」と称えました。彼のお世辞、僕は恥ずかしくていたたまれませんでした。僕はそこで直ぐに手紙を書き、僕個人の本当の姿を彼に伝えました。そのころ、僕を知り、最も愛し、最も深く強く責めてくれる人は、僕の舅父【母の兄弟に当たるおじ】易梅園先生でした。その舅父が僕を評した言葉と他人が僕を評した言葉、そして僕自身が自分の内面生活を理解している現状を、正直に告白し、僕の旧作の詩も添えて送りました。「君は僕とつきあいたいといっているが、僕はこの程度の一人の「不良少年」にすぎません。それでも僕との親交を深めますか？あなたの理想の中にある「模範少年」の田漢とどのぐらいかけ離れているか知れません。僕とつきあわないほうがいいです。自分が悪いということで、すでに苦痛で耐えら

¹ 龐士元（179－214）、字統、襄陽（今湖北襄樊）の人。三国時代に蜀国の劉備の策士。《三国志・蜀書・龐統伝》に「性は、人倫を好み、長養に勤む。毎に称述する所、多くその才に過ぐるに、時の人、怪しみて之を問う、統答えて曰く：「當今、天下大いに乱れ、雅道は陵遲【漸衰】し、善人少なくして悪人多し。まさに風を興し、道業【人倫】を長じしめんと欲さば、その譚【話】を美【かざ】らずんば、即ち声名は慕企【仰慕】するに足りず、慕企するに足らずんば善を為す者は少し。今、十を抜きて五を失うとも、猶その半ばを得、而して、以て世の教えを崇邁【推

進】し、志ある者をして自ら励ましむべけんば、また可ならざらんや」

² 黄日葵（1898－1930）、字一葵。広西省桂平の人。少年中国学会の会員。初期共産黨員。鄧中夏と一緒に『国民』雑誌社を創建した。1926年に北伐に参加し、国民革命軍第七軍政治部主任の任に就いた。後に南昌起義【武装蜂起】の宣伝委員会委員に就く。

³ 馬鶴天（1889－1962）、山西省芮城の人。当時、日本の早稲田大学に留学、留日学生総会文事委員会委員の任に就き、『民彝』雑誌の編輯に携わる。

れないです。その上、もし僕の本来の姿を見抜き、幻想が破れて、苦しめることになったら、僕は更に辛くなります。もし、この不良少年を捨てずにいてくれるのなら、ぜひ、常に僕を正し、監督して下さい。あなたも失望せずにすむし、僕も恥じることにならずにいられます。」その後、僕と日葵との筆と口での談話は、すべて人格の公開になりました。他の親友とのつきあいも、すべて同様です。それで却って僕の心中の不安はずい分軽減されました。そして僕の恋人についてはこうです。彼女は僕と小さい頃から一緒に育ちました。後になって常に手紙のやりとりをしていました。昨年夏休みに帰国した時、彼女と一緒に東京に留学に来ました。僕と彼女の性質、習慣、家庭の事、交際の事もすべて互いに知っています、だから僕は将来良い家庭をもてるかもしれないと思っています。しかし、僕達が、結婚するのはまだまだ先のことでしょうがね！

あなたが白華に出した詩を論じた手紙は、まさに僕と日葵との親交を結ぶ手紙のようです、本当に真善美の粹を集めたものです！——僕の手紙はそこまでと言えませんが——あなたはこんなに誠実で優れた人です、どうして好きにならないでいられるのでしょうか！どうして僕の詩友として、僕のような酔っぱらいを支える支援者として、求めないでいられますよう。

沫若先生！あなたの長詩『鳳凰涅槃』を拝読しました。あなたは鳳凰のように、現在の形骸を焼き捨て、切々と哀傷の挽歌を歌いながら、

焼き捨ててしまい、そしてきれいな、冷たい灰の中から、もうひとりの「自分」が生まれ変わって出てくることを今願っているのだと言っておられます。素晴らしいです、これは決して幻想ではないでしょう。なぜならばどんな人でも、自分が「生まれ変わる」という大きな願望を発しさえすれば、神様はそれに応えなければいけませんから。僕はここで、あなたの「新しい自己」と出会うのを待っています！【補注4】Romain Rolland が描写した John Christopher は、最後には「Lord, art Thou not displeased with Thy servant? I have done so little. I could do no more …… I have struggled, I have suffered, I have erred, I have created …… Let me draw breath in Thy Father's drums. Some day I shall be born again for A new fight.」と言っていました¹。我々の生涯は、いつだって「一つの戦闘のため、一回の生を受けたのち、それは「shall be born again for A new fight」【新たな戦いのために生まれ変わる】のです」！僕は学問もなければ、詩を作ることもなど知りませんのに——幾つかの詩を作ったことはあります——却ってあなたに期待を持たせてしまいました。僕に「中国新文化の真の詩人」になって欲しいとお望みとは、本当に恐縮です【補注5】。将来、僕はもしかしたら幾つかの詩を作って、あなたを慰藉し、あなたに手を入れてもらえるかもしれません。或いはできるだけ誠意をもって人とつきあえる人間になって、諸師友の大きな期待に背かないようにしようと思います。どうか僕をあなたの弟のように、監督し、指導して下さい

¹ 英語。ロマン・ロランが描写したジャン・クリストフ。ロマン・ロラン(1866-1944)は、フランスの小説家、音楽家、社会活動家。ジャン・クリストフは彼の有名な長編小説『ジャン・クリストフ』の主人公である。この英語はジャン・クリストフが臨終の前に述べた言葉である(傳雷の訳本による)。「あ

あ、主よ、あなたの下僕に対して大変不満とまでは思われなかったでしょう？僕はただわずかな事をしただけで、これ以上のことはできませんでした。曾て奮闘し、苦痛もありました。流浪しましたが、創造もしました。僕を父なるあなたの腕の中で休ませて下さい。いつか、僕は新しい戦闘のために、生まれ変わってきます。」

るようお願いしていいでしょうか？どうぞまたお手紙を下さい。春休みに東京に来られますか？

田 漢 九。二、九。

【民国9年、大正9年、1920年】

その2

沫若兄：

昨日少し気分が悪かったので、今朝ずっと寝ていて、大変遅く起きました。一階に降りると、食堂のテーブルの上に、新聞二束と手紙一通が置かれていました。手紙は、僕宛てです。——しかも「郭開貞」が僕に書いたものです。どうやら沫若兄からの返信が来たのです！あまりの嬉しさに、気分の悪さなどすっかり消えてしまいました！開封してみますと、大変長く、詩稿まで一束入っています。ざっと数行目を通しただけで、すぐに懐に入れ、急いで顔を洗い、ご飯を食べ、毎日しなければいけないことを片付けて——つまり形骸化した日課に従事し——その後で、やっとゆっくり僕の精神的な食糧を咀嚼し始めました。沫若兄！訳詩は細かく読みませんでしたが、あなたの長い手紙を二回読みました、しかも二回とも熟読しました。あなたは、われわれ二人の間に越えられない壁があるとおっしゃっていましたが、この壁はあなたの純真さによってすでに十分の九まで取り払われました。僕はいつも人が Good and Evil の間で戦っていると思っています¹。悪に勝った者は即ち君子で、人間と看做されます。悪に勝っていない者は、即ち小人で、畜獣と看做されます。人になるか獣になるかの分かれ目は、わずかに髪の毛一本にすぎず、中間などはないのです！ですから人の一生は、もし線形で表すなら、ただ波線だけです。朝には、君子で、即ち山に

登る「八」形、夕べには、小人で、即ち谷間に落ちる「V」形です。一直線に上に行ったり下ったりし続ける人はめったにありません。人は自分の人格を形成するために、「できるだけ上流を目指そうとするものです」、即ち深い谷底から高山の頂へ登るように努めるのです。深い谷に甘んじるのは「罪惡の髓」であり、必死に努力して高山へ攀じ登ろうとするのは「懺悔の人格」です。世に生まれつきの人格者は極めて少ない。ですから「懺悔する人格者」は貴いのです。St. Augustine【アウグスティヌス】、Leo Tolstoy【トルストイ】J.J. Rousseau【ルソー】の三人は、千古の人格者だと言わざるを得ません。そして、彼らの人格は、いずれも各々の『懺悔録』Confession から来ています。僕が Rousseau's Confession を読んだのは一昨年の事でした²。どれほどの感動を受けたか、どれほど氣力が湧いたか、知れません。それを具体的に言いましょう。僕は自分の短所を敢えて、あけすけに黃日葵君および友人諸君に書くことができたのです。『梅雨』のような詩を作ることができ³——これ以外にもう二篇あって、一つは『母』、一つは『弟』で、僕の家事を書いたものです。言わば一種の僕の家族の母子、兄弟の受難史ですが、発表していません。——僕は人に接し、物事に対するのにますます「胸に城府なし」【率直恬淡】になったのです。真摯な懇切な友人を求めるようになり、自分で自分の不誠実さ、即ち自分を欺き、他人を欺く行為を心から憎むようになりました。そこで今度は僕がルソーなどの崇高な偉大さを讃えざるを得なくなりました。何日か前に馮若飛君のところで孫少侯先生の『我對於一切人類の供状』【すべての人類に対する私の供述書】——『星期評論』に載ったもので⁴、戴季陶先生の短評が付いてい

¹ 英語：善と悪。

² 英語：ルソーの『懺悔録』

³ この詩は 1919 年 8 月『少年中国』第一巻第

二期に発表している。

⁴ 孫少侯（1872—1924）、字は、毓筠。安徽寿州（現寿県）の人。1906 年日本東京で同盟会

る¹のを読みました【補注6】——それで、**confession**【告白】という言葉が人生の為になると思いました。無理にでも一人の人間の全生活を転換できるからです。しかし、孫先生のように **confession** した時にはもう既に五十一歳になっています。たとえ彼に百歳までの年齢があるとしても、もうその半分を超えています【補注7】。僕たちももし良心が咎めることがあれば、一番良いのは「すぐに懺悔」することでしょう。沫若兄！あなたのことは僕に大体教えて下さったと思います。僕のような初めての交際相手のために肺腑の言葉を言ってくれました。僕を他人として見ていないことが分かります。そうでしょうか？僕へのご厚意に大変感謝しています。あなたがなさったこと【補注8】について、それがあなた一人の罪だとは思いません、逆にそれは全人類——少なくとも恋愛についての意識の強い人——の罪だと思います。特に天才にこの種の罪を犯す者が多いと思います。たまたま青柳有美氏が『女の世界』【補注9】の『恋愛逸聞号』に書いた『天才の恋』を読みました²。それには天才の恋愛の五つの特徴を挙げています。(1)早熟(2)狂熱(3)めまぐるしい変化(4)多情(5)華美です。この五つの特徴について、さらにそれぞれ一つごとに説明を加えて事例も挙げて証明しています。大変おもしろいです。「狂熱」と「めまぐるしい変化」の二種類の問題があるだけでも多くの罪を犯せると思います。昨日の午前中、ゲーテ伝を読み終えました。——『ゲーテとシラー』について書く準備をしているからです。

に参加。1912年安徽都督の任に就く。1915年、楊度らと「籌安会」を發起し、袁世凱のため、帝政を鼓吹した。『我對於一切人類的供狀』は彼が後に目覚めておこなった懺悔。1919年12月21日上海の『週刊評論』第29号に発表された。

¹ 戴季陶(1890-1949年)、字は伝賢、号は天仇。浙江省呉興の人。『星期評論』雑誌の編集

二人の生涯の友情と著述の概略を述べてみたいです。これは上海に寄った時に白華兄と決めた約束です。あなたにもゲーテに関する長編の感想、批評或いは翻訳を書いて頂くようお願いしたいです。そして白華兄の『ゲーテの宇宙観と人生観』と合わせれば、一種の『ゲーテ研究』書にも十分になりうるのです。——彼のあの恋愛行為はまさしく狂熱と「移り気」の好代表です、一生に恋人の数は十九人を超えています。ちょっと誤解があれば、すぐ別れも告げず去っていくし、十年以上の恋人でも容色が衰えたからといって、捨ててしまいます。もし罪を論ずるなら、ゲーテの晩年こそ、「悪の精華」です。合村弁護士【不詳】は恋愛と犯罪との関係を論じています。「犯罪の原因は、大半恋愛である。恋愛は人生の目的で、義務と本能の発露であり……恋愛から生じた犯罪には片思いから来るもの、そして相愛から来るものがある——だが抑止する方法を見付け出すことができない。なぜなら恋愛は人生の目的であり、義務、本能であるゆえに、……もし人生から恋愛を除けば、即ち人生の絶滅である……人は犯罪を目的として恋愛するのではない。恋愛のために恋愛するのである。たまたまある種の機会に出くわしたため、遂に犯罪に至るのである」云々、これこそ最も恋愛と犯罪の意味を述べ尽くしています。ゲーテがローマから帰ってきた後の彼の九番目の恋人、クリステイアーネとの恋愛もただ恋愛のための恋愛にすぎませんでした³、遂にあつという間に **Schiller**【シラー】の言う、所謂「墮落した交際」に陥ったのです！

長の任に就いたことがある。後に国民党の政客となった。

² 青柳有美(1873-1945)、本名は猛。日本の評論家。著書には評論集『恋愛文学』などがある。

³ クリステイアーネ(Vulpus Christiane, 1765-1816)、プルピウス・クリステイアーネのことで、1906年にゲーテと正式

当時 Weimar¹の人々は非難を加え、夫人は社交会から全く相手にされなくなりました。その上、彼らの罪にも、具体的な表れがありました。——1789年（ゲーテ、40歳の時）12月25日に私生子ゲーテ August Von Goethe が生まれました。「人の中の至人【優れた人間】」であるゲーテは、人を害することが少なくありませんでした。もし、彼が Stein 伯爵夫人を捨てたばかりだったということを想起するならば²、ゲーテの罪深さはさらに深刻になります。さらに Stein 伯爵夫人が夫のいる婦人であることに思い至るなら、いっそうどう考えればいいかわかりません。決してゲーテのことを引いて、あなたの罪を故意に軽くしそうとしているわけではありません。要するに、これは人生における一つの解決し難い問題だと思うのです。もし僕の徹底した主張に従えば、これはごく自然なことで、たとえ以前結婚をしたとしても——あなたの言い方に従えば、あなたの両親に結婚させられたとしても——いつかあなたが Fall in love with another woman 時には³、その前に結婚していた女性に対して、まあ愛がなかったわけで、少なくとも愛が希薄になったと言わなければなりません。そうすると、結婚の意義は不完全になり、いや！それはもう結婚とは言えなくなります。そして思うままに「You go your way we go ours」とすることが出来ます⁴。スウェーデンの女流思想家 Ellen Key の自由離婚論も、このことに言及しています。それが非常に詳細で明晰です⁵。彼女は「霊と肉との一致した結婚」を

主張しているのです。精神の要求と感覚の要求は切り離すことができないと言うのです。官能主義の「自由恋愛」Free love にも反対するし、禁欲主義の「純潔な恋愛」Pure love にも反対しています。総括すると、恋愛の有無をもって、結婚の道徳か不道徳かを判断するのです。平塚らいてう女史が『淑女画報』【補注 10】の結婚改善の問いに答えているのが、最も明快で適切です⁶。彼女はこう言っています。「私は従来の見合い結婚に反対です。男女の恋愛が永く共同生活をしたいという欲望になった時、即ち結婚するのです。ですから、結納だとか、結婚式だとかは、何か必要があるとは思わないのです。しかし、結婚は社会に報告する必要がある、それなら、披露宴もよし、或いは葉書でお知らせをするのも悪くありません。ただ、新婚旅行だけは、本当に良い事です！この点から言えば、あなたたちの結婚は、何枚かの葉書を追加すれば、完全なものになると言えます。或いは、いつか僕が福岡まであなたとあなたたちの「芸術の産物」——和生——を訪ねた時、あなたたちが少し「ご馳走」を作って下さればなお素晴らしいです⁷！なぜならば、仮に最後の審判の日が来た時、あなたたちの罪を宣告しようとする人が現れたら、僕は身を挺して出て来て、あなたたちの弁護士になることを願っているからです！この問題については、僕は全精力の十分の四で研究しようとする決意しています。今後、『太平洋』「The Pacific Ocean」の女性問題研究を担当し⁸、『少年中国』で『恋愛生活論』

に結婚。

¹ ドイツ語。ヴァイマルとはドイツ封建割拠時代にザクセン・ヴァイマル公国の首都。

² シュタイン伯爵夫人（Charlotte Von Stein, 1742-1827）、1775年ヴァイマルでゲーテと恋愛関係にあった。

³ 英語：他の女に夢中になる。

⁴ 英語：各々の道を進む。

⁵ エラン・ケイ（1849-1926）スウェーデンの

思想家、女権運動家。著作に『児童の世紀』と『愛情と倫理』などがある。

⁶ 平塚雷鳥（1886-1971）、日本の評論家。新婦人協会を組織し、『母性の復興』などの著作がある。

⁷ ご馳走：日本語。美味な料理、上等な豊富食事。

⁸ 総合評論月刊雑誌。1917年3月に創刊、陳剣農が主編である。1925年6月に停刊、『現

を書こうと考えています。さらにこの恋愛問題を題材にして、一つの劇を作りたいと思っています。もしかしたら、あなたたちお二人も僕の劇の **Model** になるかもしれないですね¹!

成瀬君【補注 11】のことはもともと知っています。しかし深いつき合いはありません。彼の住んでいる所【補注 12】に僕がよく知っている知人もいます。何日かしたら成瀬君に会いに行っているいろいろおしゃべりするつもりです。あなたたちの住所はどんな所ですか? 地図を描いて送ってくれませんか? 春休みに京都に鄭伯奇兄を訪ねる予定です²、そして福岡まであなたたちを訪ねに行きたいです! 昨年、ああ、一昨年だったかなあ、須磨子³が演じている **Hauptmann** の **Die versunkene Glocke** を見ましたが⁴、現実の生活と芸術上の生活が衝突しているような感じを味わいました。今思い出してみれば、**Heinrich** の苦悶は、まるであなたの苦悶のようです。しかし世界は結局そんなに悩ましいものではありません。 **the Sun is coming!**⁵ あなたたちもあの愁いの雲を捨てればよいのです! 人々は辛く苦しい話を話すのですが、却ってこの生き生きとした人生を暗くしてしまいます。僕は、反って、嫌になってきました! さあ、忘れましょう! もうこんな話は止めましょう、僕はただこの小さい書斎で心から静かに黙々とあなたとあなたの奥様が限りなく幸せで、情愛が不朽でありますようお祈りするだけ、あなたたちの和生が詩のように自然に成長す

るように祈るだけです。僕の恋人は、残念なことに今はまだ日本語が上手に話せません、そうでなければ、近い将来きっとあなたの奥様と友達になれると思います。沫若! 僕たち二人のことを知らないでしょう。僕と漱瑜もすでに幾らかの苦痛を経験してきたんですよ、あなたたちと比べると軽いものですが、彼女と一緒に日本に来たことは、彼女の父親以外に家族は誰も知りません。僕たちは一緒に日本に来る時、旅費もありませんでした。幸いに彼女の父親——僕のおじ——の助けで、やっと来られました。この間に起こった家族の騒ぎについては上海を通った時、すでに白華に詳しく話しました。あなたと会った時にもゆっくり詳しく話しましょう。僕は西洋の哲学者のこの言葉——**He who knows no pain knows no happiness**⁶ に深く同感しています。僕たちも本当にこのように言えるのです。言葉では僕の気持ちを表現できません。ただお二人のご健勝を祝福しています。

あなたの弟 漢 九、二、十八

【民国 9 年、大正 9 年、1920 年】

【Ps】どうぞしよっちゅう手紙を下さい。僕には小さいな詩集がありますが、北京の康白情君【補注 13】に送りました⁷。残念なことにその草稿がありません。もし登載されたら、君に送りたいですが、如

代評論』に改めた。

¹ 英語: モデル。

² 鄭伯奇 (1895-1979)、字、隆瑾、陝西省長安の人。作家。『抗争』、『軌道』などの著作がある。初期、東京帝国大学で学んだ。少年中国学会会員で創造社の発起人の一人である。

³ 即ち松井須磨子 (1886-1919) のことで、日本の著名な劇団女優。

⁴ ドイツ語: ハウプトマンの『沈鐘』。ハウプトマン (1862-1946) は、ドイツの劇作家。その代表作『沈鐘』は 1896 年に書かれた。主

人公の鋳鐘師ハインリッピが鐘を鋳るため、最後には水溺れで死んだストーリーで、芸術と生活との矛盾を象徴している。**Heinrich** は、即ち『沈鐘』の主人公ハウプトマンである。

⁵ 英語: 「太陽はまさに今のぼっているのです」。この言葉は、『沈鐘』の中でのハインリッピの最後のセリフである。

⁶ 英語: 苦痛を知らない者は、幸せも知りえない。

⁷ 1922 年に出版した『江戸之春』を指す。

何でしょうか？

あなたたちの生活はどうですか？教えて下さることができますか？僕と漱瑜女史はまだ **Pure love** の状態を保っています¹。一緒に住もうという気持ちになった時、もしかしたらあなたたちに葉書でお知らせするかもしれません。一笑。

その3（上）

沫若兄：

Feb. 25²のあなたのお手紙、今日の午前中に受け取りました。この数日間『少年中国』二月号を見たくて待っているのですが、なかなか来ないため、気が滅入っています。同時に僕の手紙があなたに届いたかどうかとも気がかりでした。なぜならあなたはあんなに「omoikkide」³手紙をお書きになったのですから、心中きっと辛かったでしょうし、もしその上に僕の返信をまだ受け取っていない——或いは **life**、**love**⁴の何たるかを知らない人から、**conventional**⁵な言葉で自分を責められるような目にあうかも知れないと考えておられたら——あなたはきっともっと辛いでしょうから、ですから僕はお二人が早く僕の手紙を受けとってくださいばいいのにと願っていました。或いは手紙が少しでもあなたとアンナ嫂【アンナ姉さん。「嫂」は兄嫁。既婚の、自分と同年輩の若い女性に対する呼称として使う】の慰めになれば、僕はこの上なく嬉しいのです。今日の午前中、東京は春の雪が降りました、濛々と煙る空の下に、砕けた玉のような雪がしきりに降っていました。そんな

なことを考えながら一人でぼんやりに行っている所に、突然門の前に郵便配達が見え、手紙を投げこんで、去って行くのが見えました。急いで下に降り、取って見たら、これこそ僕が「machikaneta」沫若の返信でした⁶。

あなたの詩——『独游大宰府』【一人太宰府に遊ぶ】の詩は、あなたの **lyrical**【抒情的】な天才ぶりが至る所に見られ、白華の批評が間違っていないことが分かります。しかし、あなたの詩に対する僕の評価は、あなたには詩才があるというよりは、むしろあなたには詩的魂があるというものです。なぜならばあなたの詩は一首一首すべてがあなたの血、あなたの涙、あなたの自叙伝、あなたの懺悔録だからです。あなたのような純真な詩を読むのが好きです。僕は旧技巧派の詩も好きでないだけではなく、新技巧派の詩も好きではありません！『日華公論』⁷で日本人が訳したあなたのあの『児を抱き、博多湾で浴す』と『鷺』を読みました⁸【補注 14】。僕は特に前の詩が好きです。すでにあなたの経歴【補注 15】をお聞きしていますので、あなたの詩がすべてあなたの生の断片であることが分かるのです。あの詩の日本語訳も大変上手で、とても自然でした——

坊ヤヨ！御覧ヨ、アノ海ノ銀ノ波ヲ。

夕日ノ中ニ光ツテユル海ハ磨ィタヤウデセウ。

坊ヤヨ！御覧ヨ、アノ西ノ山影ガ紗ヲ着テデルノヲ。

坊ヤヨ！ワ前カアコホニ海ノヤウニ光リ

¹ 英語：純潔な愛情。

² 英語：二月（**February**）の略語。

³ 日本語：「思い切って」のローマ表記。「omoikitte」とすべきである。

⁴ 英語：生活、愛という意。

⁵ 英語：ありきたりなという意。

⁶ 日本語：「待ちかねた」のローマ表記。

⁷ 天津の日本租界で発行していた日本語月刊雑誌。

誌。1913年（大正二年）8月に創刊。編集者は小倉章宏。

⁸ この二首の詩は最初両方とも1919年9月11日上海の『時事新報・学灯』に発表された。前者は、原題、『抱和児浴博多湾中』、後者は『女神』に収めていて、題名は、『鷺鷥』とあるべき。

アイ。

ナニ山ノヤウニ清イ身体ヲ心ニナッテ頂戴ヨ。

この詩の原文は読んでいないのですが、しかし、この訳詩だけでも十分に人に伝える価値があります。この雑誌には同時に僕の詩『梅雨』と『朦朧の月』も訳載しています¹。しかし、訳にはいくつらの間違いがあります。他人の詩を訳すことの難しさを感じます。

僕の今後の生涯は、恐らくさまざまな面に亘るでしょう。しかし、文芸批評家、劇作家、画家と詩人の領域を出ないと思います。小さい頃から画家としての腕前がありましたが、しかしこちらの方はもう久しく腕を試していません。多分ただ文芸描写の方面に応用できるだけでしょう。文芸批評家になることに情熱を傾けているほか、一番熱心にとりくんでいるのは **Dramatist**² になることです。僕は以前 **A Budding Ibsen in China**³ と署名したこともありますが、僕が如何に身の程知らずだったかが分かるでしょう。現在僕が収集している近代劇の脚本は凡そ五十種類余りで、大体とても重要なものです。百種類までになったら、記念パーティを開こうと思っています。その時にはあなたもぜひ来て下さい。今構想中の脚本の腹案で最初のものは『歌女與琴師』【歌姫と胡弓奏者】です⁴。それは **Democratic Art**⁵ を鼓吹する **Neo-Romantik**⁶ 劇です。場所は上海で、時代は民国0

年。題材は女の歌い手と彼女の胡弓奏者との恋愛です。(性質上の) **heroine** の **model**⁷ は今上海で梨花大鼓【補注16】を歌うある女性(劉翠仙)です。しかし、上海社会とこの女性もそれほど高尚かつ優美ではないと思います。だからこの劇は **Realistic**⁸ のるつぼを経由した **Neo-Romantic**⁹ の劇なのです。この劇のプロット【構想】は以前鄭伯奇兄に話したことがあります。彼も誉めてくれました。この前の僕の手紙でも触れていませんでしたか? この劇のほか、また『正義乎? 人情乎?』【正義か? 人情か?】という劇を考えています。それは、結婚後の男女の性的純潔の問題を描写するものです。江西省某県で一昨年のある時実際に起きた出来事で、とても深刻なものです。さらに今日青年の間にごく普通の現象である「**Real life or Scientific life** と—— **deal life or artistic life**」¹⁰の衝突を描写するものを書きたいです。この種の衝突現象は恋愛問題の上に表れるものが最も多く、しかも研究の興味に富むものです。こういうわけであなた方二人ももうすぐ僕の **Model** になりそうです。いいえ、お二人だけではなく、黄、左、周、李¹¹等々の諸君たちにもお出まし頂き演技してもらわないわけには行きません。

現在中国で **Modern Drama**¹² を研究するものはまだ少数です。その中で例えば北京大学教授(劇曲)宋春舫先生が¹³、どうやら今日の中国現代劇研究の大家に入るようです。彼は四ヶ国語に精通(?)していて、家は豊かで、金に飽か

¹ 田漢のこの二首の詩は、最初は1919年8月15日『少年中国』第一卷第二期に発表されている。

² 英語：劇作家。

³ 英語：中国のイプセンの卵。

⁴ 即ち『バイオリンとバラ』、1920年11月、12月の『少年中国』第二卷第二期と第六期に発表。バイオリン、英語の **Violin** の音訳。

⁵ 英語：民主の芸術。

⁶ ドイツ語：新ローマン主義的。

⁷ 英語：女主人公のモデル。

⁸ 英語：現実主義。

⁹ 英語：新ローマン主義。

¹⁰ 英語：本当の生活或いは科学的な生活と理想的な生活或いは芸術的な生活。

¹¹ 少年中国学会の黄仲蘇、左舜生、周無、李璜を指す。李璜、字幼椿、1895年生まれ、四川省成都の人。中国青年党の頭目である。

¹² 英語：現代劇。

¹³ 宋春舫(1891-1938)、浙江省呉興県の人。著書に『宋春舫劇曲集』などがある。

して本を買っているということです。またつねづねロンドン、パリ、ローマの間に居留していると称し、現在はまたフランスに行っているそうです。彼はチャンスに恵まれ、学殖も豊かです。しかし、以前彼が訳した Sudermann¹の『推霞』の序言を読んだことがあります、とても荒っぽい訳で、Modern Spirit をもつ人達を深く理解している類の人ではありませんでした²。例えば、「ズーデルマン氏の劇中の女性の人格——『名誉』Die Ehre の Alma³だとか、『故郷』Heimat の magda⁴とか、『Das ewige Mannliche』⁵の皇后とか——みんな、野卑で、凶暴、猥褻で語るに足りない。たとえ『Das Glueek im Winkel』⁶の Elizabeth でさえ無恥の謗りを免れない。」と言っています。「野卑で、凶暴、猥褻で言うに足りない」、「無恥」と言った言葉は、一方的に Alma、Magda……たちに加えていいものでしょうか？四本の劇のうち、二つは脚本(?)を読み、一つは実演を見ました。実演をみたのは Magda(Heimat)です。Magda は、そんなに「野卑で、凶暴、猥褻で語るに足りない」などとは思えませんでした。ただ一人の大

変個性の強い human being⁷で、一から十までおとなしく男の言いなりになるような婦人ではないだけですし、また一時代の道德の犠牲者で、Milieu⁸の暗澹なる産物にすぎません。もし本当に言うに足りないのなら、ズーデルマンも彼の彩筆を汚してはなりませんし、東西各国の名優たちもわれ先にと競って演じるようなことをしてはならないでしょう。Magda のこうした個性が理解できず、Heimat という劇に心を込める所が理解できていないとすれば、僕は宋先生の批評眼に対して、疑問をもたざるをえなくなります。宋先生が選んだ泰西⁹名劇百種にも多くの玉石混淆と遺漏の恨みがあります。——Magda という劇は日本では明治四十五年(民国五年)五月三日に島村抱月先生が組織した「文芸協会」によって東京の有楽座で上演されました(僕がみたのは民国七年九月です)¹⁰。「日本の花、光、愛」【補注 17】である須磨子が Schwartz¹¹【Schwartz の誤字か】の娘の Magda を、土肥庸元¹²が Schwartz を、佐々木積¹³が Heffter Dinght (牧師)¹⁴を演じました。後に大正三年(民国三年)八月に歌舞伎座でもう一回上演されました。須磨子が Magda、武田政

1 ズーデルマン (Hermann Suderman, 1857-1928)、ドイツの劇作家。著作に『名誉』、『故郷』などがある。『推霞』(Teja) は『死者たちに捧げる』劇的一幕劇である(宋春舫がかつてこの劇を訳して、1919年2月1日『新潮』雑誌第一期第二号に登載)である。

2 英語：近代精神。

3 アルマ：『名誉』の女主人公。

4 マグダ：『故郷』の女主人公。

5 ドイツ語：『永久の男性』、ズーデルマンの『死者たちに捧げる』的一幕劇。

6 ドイツ語：『街角の幸せ』。エリザベスは、この劇中の人物。

7 英語：人。

8 フランス語：環境

9 泰西：旧時、西洋(特にヨーロッパを指す)に対する呼称。

10 島村抱月(1871-1918)、日本文芸批評

家、演劇活動家。『近代文芸の研究』などを著す。1906年に、坪内逍遙と一緒に「文芸協会」を組織した(後に純粹の新劇団体となる)。女優松井須磨子と芸術座を組織し、日本各地で西洋の現代劇を演出し、大正時代に新劇隆盛を出現させた。

11 シュワルツエ：『故郷』の人物。マグダの父である。

12 土肥庸元(1869-1915)、別名土肥春曙。日本新劇初期の俳優、文芸協会のメンバー。『ハムレット』でハムレットを演じたことがある。

13 佐々木積、日本新劇初期の俳優。文芸協会のメンバー。シェイクスピア著の『ハムレット』、イプセン著の『人形の家』とズーデルマン著の『故郷』などの劇に出演。

14 ヘターデング：『故郷』劇中の人物。

憲が Schwartz¹、中井哲²が牧師を演じていました。大正七年九月にこの劇は『神主の娘』と改作され『沈鐘』と一緒に上演されました【補注18】。須磨子は Magda の妹 Marie【マリイ】を演じました。僕が見たのはこの時のものです。その夜は九月五日で、帰るときに、秋雨が降り注ぎ、街灯の光が道路に映えていました。島村氏のこの劇の翻訳の序言にとってもいい事を言っています【補注19】。

「此の劇にも種々の思想問題は含まれていて、様々の解釈を容れ得ると共に大掴みに言えば、中心の問題はシュワルツエの世界 (Schwartz、霊的世界?) とマグダの世界 (Magda、肉的世界?) と、而して此の矛盾した二つ世界を調和せんとする牧師の世界 (Heffter Dingt、霊と肉との調和する世界) と、三様の思想道徳が、終に統一を得ずして悲劇に了る所に存してる。欧州の批評家の伝える所によれば、サラ・ベルナール (フランス名女優 Sara Bernalt³) のマグダ (magda) は、最後には舞台の中央に其の新世界の威儀を輝かして直立し、以て暗に新道徳の前途をマグダ (Magda) の勝利に求めるような解釈で演じたという。之に反して、カムメル夫人 (イギリスの名女優 Mrs.Cammel⁴) のマグダ

(Magda) は、舞台に泣き崩れて、悔恨の意を見わし、マグダ (Magda) の世界の挫折すべきことをほのめかしたという。(イタリアの女優 Duse⁵、即ち Dannunzio⁶の愛人もこの劇に出演しているが、どんな表現しているかは不明) 文芸協会が……むしろマグダ (Magda) とシュワルツエ (Schwartz) 一家と牧師と、三様の世界が分裂のままに残り、各々自分をも捨て得ないで、(衝突から始まり、衝突のままに終わり)、新道徳の前途に尚お幾多の曲折のあるべきことを提示し、……(云々)」

沫若兄！われわれは必ずこのような理解力と批評眼をもってはじめて新劇を論ずることができ、またすべての学問を論ずることができます。一つの芸術品に対して、もし、understand⁷もできない、また appreciate⁸もできないなら、せつかくの芸術品の価値を無にしていまいます。現在の人々はみんな度量が狭いです。少しでも露骨、深刻なものを目にしたら、すぐ顔を覆って立ち去り、口汚く罵ります。take things as it is⁹. しようとしません。ロシアの文豪 Anton Chekhov【アントン・チェーホフ】の Humourous tales の中に A work of Art. という物語があります¹⁰。胡適之先生はそれを『一件美術

¹ 武田正憲であるべき。日本新劇初期の俳優。文芸協会のメンバー。シェイクスピアの『ハムレット』、『ヴェニスの商人』、トルストイの『復活』等に出演。

² 中井哲 (1886-1933)、本名浅井房次。日本新劇初期の俳優。文芸協会のメンバー。

³ サラ・ベルナール (Sara Bernhardt, 1844-1923)、フランスの女優。長期にわたり、欧州、アメリカ州、オーストラリア州へ巡回演出を行っていた。

⁴ キャメル夫人、英国女優。

⁵ エレオノーラ・ドゥーゼ (Eleonora Duse, 1859-1924)、イタリア女優。シェイクスピア、イプセン、ゴルドーニなどの作品に出

演。『ハムレット』のオフィーリアを演じることで、評判を得る。

⁶ ダンヌンツィオ (Gabriele D'Annunzio, 1863-1938)、イタリア作家。後にファシズムの頭目ムッソリーニに追随し、「親王」の称号を得た。著書に脚本『死都』『ラ・ジョコング』などがある。

⁷ 英語：理解。

⁸ 英語：鑑賞

⁹ 英語：物事のありのままを受け入れる。

¹⁰ Anton Chekhov (1860-1904)、ロシアの小説家、劇作家。Humourous tales：ユーモラスな物語。A work of Art：ある芸術品。

品』と訳し、雑誌『新中国』に登載したように思います¹。——こういう話です。ある医者がある老婦人 **Smirnova** の一人息子 **Sasha** を病から治してあげたのです²。老婦人はその息子 **Sasha** に一つの美術品——古い青銅製の裸体像——を持たせ、医者への謝礼として贈るように命じました。**Sasha** はそれを持って行きますが、医者はどうしても受け取ろうとしません。どうにか無理やりに受け取ってもらいました。**Sasha** は家にこれ一つしかなく、対で贈ることができないと謝ります。別れた後に、医者が独り言を言います。「**This is beautiful, all right, it would be a pity to throw it away and yet I dare not keep it...Hm! now who in the world is there to whom I can present or donate it?**」³そして、それを **Ukhor** に贈りました。**Ukhor**⁴は弁護士ですが、彼も受け取るのを躊躇し、こう言います。娘がしょっちゅうに会いに来るし、しかも下僕に見られたら面目がたたない、と。強く勧められてしぶしぶ受け取ります。しかし、彼もまたそれをコメディイの大家である **Shoshkin**⁵に贈ります。彼がきっと喜ぶに違いないと思ったからで、心中「**The rascal loves such things, and besides, this is his benefit night**」⁶と呟きます。ところが思いもよらず **Shoshkin** もそれを受け取るのを怖がり、「**I live in a private apartment!**

I am often visited by actresses! And this is not a photograph that one would conceal in a drawer!」

⁷と言いながら、仕方なく受け取ります。ですが、老婦人 **Smirnova** が古銅器を買い集めていると聞いて、すぐに彼女に売り払います。老婦人はそれが前に医者へ贈った物だとは知らないの、先日贈った物と対になると思い、医者へのお礼に、息子に届けさせました。先生は受け取って何か言おうとしますが、「**His power of speech was gone ……**」⁸というわけです。これは滑稽な小説ではありますが、天下の芸術品のため、深い溜息をつかざるを得ません。真の芸術品には、理解できる頭脳と鑑賞の精神（或いは勇氣）を持つ人が必要です。さもないと、この裸体像の **candelabrum**⁹の悲運に陥ることを免れません。この作品での、**Sasha** と医者との対談は頗る興味深いものです。**Sasha** は医者にいます。——

「**Why, Doctor, what a strange conception you have of art! This is a real masterpiece, just look at it! Such is its harmony! No beauty that just to contemplate it fills the soul with ecstasy and makes the throat choke down a sob! When you see such loneliness you forget all earthly things ……just look at it! What life, What motion, What expression.**」¹⁰

¹ 胡適之（1891－1962）、名は適、安徽省績溪の人。当時、北京大学教授で、彼の訳した『一件美術品』は1919年5月15日の『新中国』第一巻第一期に登載。

² スミルノワ、サシヤの二人とも『一件芸術品』中の人物。

³ 英語：「これはとても美しい、実に。捨ててしまうのは余りにもったいない。しかし、これを置いておく勇氣もない……ええ！この世の誰かに贈ったり、寄付したりできるものかね」

⁴ ウクハオル、『一件芸術品』中の人物。

⁵ シーシキン、『一件芸術品』中の人物。

⁶ 英語：「この悪党はこんなものが好きなんだ

よね。まして今彼はちょうど慈善公演をしている夜なんだから。」

⁷ 英語：「僕は個人所有のマンションに住んでいるんですが、有る「長い髪」（女優）がよく訪ねて来るんですよ、この像は写真みたいに引き出しに隠したりできませんからね。」

⁸ 英語：「彼は話す能力を失った。」

⁹ 英語：枝つき大燭台。

¹⁰ 英語：「ああ、先生、あなたの芸術に対する見方はなんておかしいんでしょう！これは真の傑作です、よく見てください！こんなに均整がとれ、こんなに美しい。黙ってそれを注視するだけでも人をうっとりさせます。人は思わず固唾を吞みます……この孤独な姿を見

Sasha は真に理解する頭脳と鑑賞する精神を備えた人だと言えます。医者には Sasha に答えます。

「I quite understand all this, my dear boy,
I am a married man, Little children run in
and out of this room and ladies come here
continually.」¹

この医者は、理解する頭脳はあるけど、鑑賞する勇気がないと言っていいでしょう。世界には人の前では顔を覆って立ち去り芸術を罵倒するくせに、人のいない時には玩味し愛撫して手離すことのできない人も大勢います。一言で言えば、紳士面をした悪魔の文明です。例えば、あなたたちの事も、もし公表したら、必ず顔を覆って立ち去り口を極めて罵倒する人が出てきます。とりわけ、彼らがあなたたちが経験した場面に身をおいとしたら、恐らくあなたたちほど立派な態度を示せないでしょう！僕は結婚と恋愛とは切り離せないと主張します。(未完)

本文のテキストと翻訳について

本文は『三葉集』に収める、田漢の郭沫若宛書簡三通の翻訳の前半である。底本、注釈は前回と同じで、『三葉集』(田漢・宗白華、郭沫若著 上海書店刊行 1982 年 6 月)を底本とし、脚注部分は『郭沫若全集』文学篇 第 15 卷(人民文学出版社 1990 年 7 月)の孫玉石(北京大学教授)注に従った。ただし、一部内容を改めたり、増やした箇所があるのも、前回と同様である。また、この翻訳の作業の経緯は前稿(「我的作詩的経過」と『三葉集』その 1、2)と同様である。(2018 年 1 月)

だけで、世間のすべての俗事を忘れられます。只ちょっと見さえすれば、どんな生活か、どんな感情か、どんな表情かを。」

¹ 英語:「そういうことは全部よく分かっているんだよ。ねえ、君! だけど、僕はもう結婚

訳注 本文の単語など原本の脚注以外に注釈が必要と判断したものは当該の語の直後の【 】内に示した。

補注 本文中、背景の説明が必要と判断したものは、以下に「補注」として掲げた。

【補注 1】『三葉集』は宗白華の田漢あて手紙から始まるが、そこに田漢がここに書いている文がそのまま引かれている。白華は 20 年 1 月 3 日付郭沫若宛手紙で郭に田漢を紹介し「彼は欧米文学をよく研究しています。いま東京に留学しています。あなたと同調できます。私はあなた方二人が手を携えてアジアの未来の詩人になってほしいと思います。もしその気があるなら時間をつくって彼に会いにいらしてください。私が紹介します(この手紙を持って行けばいい。われわれの付き合いは精神を重んじましょう。形式はいらない)」と書いている。

【補注 2】易梅園について小谷一郎は以下のように紹介している「易梅園は名を象という。彼は田漢の母易克勤の弟で、のちに田漢の妻となる易漱瑜の父でもある。田家は田漢 8 歳の時に父田禹卿が死亡、没落した家を女手一つで支えてきたのが母易克勤だった。その時彼らを支え、援助してきたのが易梅園である。田漢が日本に留学できたのも、折りしも易梅園が湖南省留日学生経理処経理員に任命されたからだった。」(小谷「田漢と日本(一)―「近代」との出会い」『日本アジア研究』創刊号、2004 年 3 月)また、同論文によれば易梅園は「1917 年 11 月湖南省民政庁庁長となり帰国した」という。

【補注 3】田漢『詩人與労働問題』『少年中国』第 1 巻第 8 期(20 年 2 月 15 日発行)、第 9 期

している。子供たちは、この部屋に出入りする。お嬢さんたちもしょっちゅうここに来るんだよ。」

(20 年 3 月 15 日発行)に掲載された。中国文 6 万字に及ぶ長編論文。田漢はこの論文の掲載誌『少年中国』を、この 1 週間後に郭沫若の家で読んでいる。(顧雯・岩佐『三葉集』その 4-1)東海大学経営学部紀要、第 2 号(2014 年度) 35 頁、40 頁の補注 7 参照。

【補注 4】郭沫若の 1 月 18 日付宗白華宛手紙に「僕はいまとても Phoenix のようになりたい。香木を拾い集めて、僕の今もっている形骸を焼却し去り、哀切な挽歌を歌いながら、すべてを焼却し去り、その清く冷たくなった灰の中から「僕」を再生させたいのです。しかし、それもついには一つの幻想に終わるのではないかと恐れているのです！」とあるのを受けている。顧文・岩佐『三葉集』その 1「東海大学総合経済学部紀要、第 4 号、2011 年、53 頁参照

【補注 5】郭沫若の 1 月 18 日付宗白華宛手紙に、田漢について、おそらく彼こそ「わが国の新文化の真の詩人にふさわしい人です」とあるのを受けている。顧文・岩佐『三葉集』その 1」、53 頁参照。

【補注 6】孫少侯(毓筠)の「我对于一切人類的供状」は彼が辛亥革命成功後、北京に入り袁世凱と会い、重用され、その後袁世凱のために尽してきた経歴と、その中で北京の政客、軍閥らとの、酒や阿片に溺れ墮落した生活を過ごした日々などを振り返り、それを懺悔したもの。当時社会的に大きな反響を呼んだものと思われる。

【補注 7】孫少侯の生年は 1872 年というのが定説のようで本文の脚注 9(孫玉石注)もそれに従っているが、別に 1869 年説がある。そうであれば『我对于一切人類的供状』を発表した 1919 年末に五十一歳であっても不思議ではない。田漢は、1869 年説に拠っているのである。

【補注 8】郭沫若とアンナとの恋愛―結婚にいたる一連の経緯。郭沫若は田漢にその経緯を事細かに知らせている。(顧雯・岩佐『三葉集』

郭沫若より田漢への手紙 その 1-3」東海大学経営学部紀要、第 4 号(2016 年度) 16-19 頁参照。

【補注 9】『女の世界』は青柳有美によって創刊され、実業之世界社から刊行された月刊誌。

1915 年 5 月から 1921 年 3 月まで続いた。青柳は秋田市の人。本名は猛。同志社普通学校を卒業後、教師、煙草屋、文筆家などさまざまな職を経験した。実業之世界社の編集者でもあった。

【補注 10】 津上智美によれば、『淑女画報』は「明治 45(1912) 年 4 月から大正 12 (1923)

年 11 月まで東京の博文館から発行された総合婦人グラフ雑誌である。四六倍判、口絵 40 ページ、本文 96 ページという構成で、定価 25 銭(廃刊時は 70 銭)であった。1937 年発行の『博文館五十年史』(230 ページ)によれば、本誌は「主として良家の令嬢や家庭の現状を紹介し、最初『婦女画報』と称したるも、四月一日発行の際には『淑女画報』と改題し、甚だ好評にて、大正十二年十一月まで十数年間継続発行したが、同年九月の大震災に際して廃刊した」という。(津上智美『婦人グラフ雑誌『淑女画報』(1912~1923)に見るピアニスト小倉末子と閨秀音楽家たち』『神戸女学院大学論集』 第 59 巻 第 1 号、2012)

【補注 11】成仿吾(1897-1984)をさす。郭沫若は田漢への初めての手紙(1920 年 2 月 15 日)で「一人の親友を君に紹介する」として、東大造兵科学生、口下手だが誠実で朴訥、詩の著作もあると、成仿吾を紹介している。ここはそれを受けている。顧雯・岩佐『三葉集』郭沫若から田漢 1-3」東海大学経営学部紀要(2016 年度。18 頁。

【補注 12】郭沫若の手紙には現在「戸塚町字諏訪八二、月印精舎に住んでいます」ある。月印精舎には、後に田漢も住むことになる。

【補注 13】康白情(1880-1945)四川省安岳の人。詩人。北京大学に学び、1918 年傅斯年、羅家倫らと新潮社を発起、19 年『新潮』に処女作を発

表した。少年中国学会に参加、五四運動に身を投じた。20年6月来日。北京大卒業後アメリカに留学している。詩集に『草兎』、『河上集』などがある。康白清は李大釗とともに『少年中国』の編集を担っていた。また北京大学新潮社の発起人でもあった。田漢が自分の詩集の原稿は康白清に送った。もし掲載されたら云々と書いているのは『少年中国』(あるいは『新潮』)に掲載されたら、という意味であろう。

【補注 14】「抱児浴博多湾」「鷺」は『日華公論』(天津、日華公論社) 1919年10月号に訳載された。これが郭沫若作品の日本語訳の最初のものである。次いで、22年には大西斎、共田浩編訳『文学革命と白話新詩』東亜公司(北京)にも彼の詩が収録されている(岩佐「日本における郭沫若研究」『熊本学園大学』参照。)

【補注 15】原文: oareer だが、career の間違いである。

【補注 16】山東大鼓ともいう。「大鼓」は民間の謡い物芸能の一つ。演者がカスタネットと小太鼓で調子を取りながら、三弦の伴奏で韻文の物語をうたう。間だに台詞も挟む。清末に河北、山東の農村地帯に起り、20年代上海でも演じられるようになった。

【補注 17】小谷一郎はこの語が『少年中国』第1巻第2期、19年8月15日掲載の康白情の詩「送客黃埔」(「客を黃埔に送る」)の一節「看看涼月麗空／才頭出淡粧的世界／我想世界上只有光／只有花／只有愛！／我們都談着——談到日本二十年来底戲劇／也談到“日本底光、底花、底愛”底須磨子／」(見よ冷たい秋の月が空にかかり／月光で薄化粧した世界がようやく姿を現した／ぼくは思う 世界にあるのは光のみ／花のみ／愛のみ！と／ぼく達は口々に話した——二十年来の日本の演劇について／「日本の光、花、愛」の須磨子について／)に由来することを指摘し「この詩は、夏休みを利用して帰省する田漢たちを、康白情たちが黄浦

江の埠頭で見送った時のことを詠んだものである」として、「我們都談着——談到日本二十年来底戲劇／也談到“日本底光、底花、底愛”底須磨子」を引用している。

これに関連して思い浮かぶのが詩人馮至の回想である。1921年に詩作を開始した馮至は、後に二十年代初期の北京を振り返って「当時の北京は一面灰色で、大通りから路地裏まで、いたるところ貧苦の姿と悲痛な物音で満ちていた。われわれは当時の青年の口ぐせ「没有花，没有光，没有爱」(花もない、光もない、愛もない)を好んで口にした。(馮至『西郊集』1957年、「後記」)と書いている。「没有花，没有光，没有爱」は、五四期社会状況の下で生きる青年たちの閉塞的な心理を表現した語として使われることのあつた語だが、康白情の詩はそれを意識したものだったのかどうか興味がある。」

【補注 18】田漢はここで『故郷』を「『神主の娘』と改作され」と書いている。だが、小谷一郎によれば、『神主の娘』は①上演時のパンフレットでは「松居松葉作」と書かれ、また松居の作品集『松葉脚本集』(菊屋出版部、1915年)にも松居の創作劇として収録されている。一方②田中栄三『明治大正新劇史資料』(演劇出版社、1964年12月)に「ハンキン作『最後のド・ムラン家』の翻案」とあり、またここに見たように③ブーデルマン『故郷』の改作(翻案劇)という田漢の手紙の一文がある(中国では『神主の娘』は「長い間、ブーデルマン『故郷』の「翻案劇」と思われてきたという)。小谷は、これらの一々について調査し、『神主の娘』は「ブーデルマン『故郷』の改翻案劇ハンキン作『最後のド・ムラン家』を下敷きにしたものであることを明らかにし、田漢がなぜそう思い込んだかについて「これについてはもはや神のみぞ知るとしか言いようがない」と書いている。(小谷「田漢と日本——「近代」との出会い」補注2に同じ、による)

【補注 19】島村抱月の原文は国立国会図書館デジタルコレクション(『故郷』ズーダーマン原作、島村抱月訳及補、金尾文淵堂 1912 年)によった。手紙の中では、抱月の序文を田漢が中国語訳している、引用文中の()内の語句は、翻訳の際に、田漢が書き加えたものである。

解説(岩佐昌樟)

今号は『三葉集』の三人の書簡のうち、田漢から郭沫若にあてた手紙の翻訳である。

手紙は全部で三通あるが、3 通目はこの時期の田漢の思想や演劇観などを披露した渾身の力作で、長文であり、本号では、その前半部分までしか訳していない。

1 通目は、宗白華の紹介を受けて、田漢が郭沫若に出したはじめての手紙である。いわば初対面のあいさつ、実際には親交を求める内容である。

このとき、郭沫若 28 歳、田漢 22 歳、二人を結び付ける役割を果たした宗白華は郭沫若より僅か 1 歳年下の 27 歳である。みんな若い。手紙には若さに特有の自己主張と相手に認めてもらいたいという認知の欲求(それは自己顕示欲と紙一重だ)が溢れている。

1 通目の手紙は、2 月 9 日付け、田漢は「郭沫若先生」と呼びかける。そして郭沫若の詩と詩論をすでに読み、感服し是非友人になりたいと願っていることを率直に述べている。その上で、自分は誠実な人間が好きで、親交を深めたいと思う人間とは、偽りの関係を結びたくない。自分の悪の部分もふくめすべてをさらけ出し、それでもいいという人間とだけ友人になりたい、という「人格公開」の友情観を語り、自分が親交を結ぶ人間とはすべてをさらけ出す「人格公開」だと書いている。

それに対する郭沫若の返事は 2 月 15 日付け。その内容は本連載『三葉集』郭沫若より田漢への手紙 その 1-3(東海大学経営学部紀要第

4 号(2016 年度)) 16-19 頁に訳載したので、詳しくはそれを参照願いたい。

いま、その中心的部分をまとめれば以下のようである。郭沫若は、宗白華の自分に対する評価が過褒であり、それは自分が白華に「はつきり、明快にぼく自身の汚らしいところを全部白状しなかったため」であり、わざと「言葉を濁し、巧みに自分を隠し、自分も人も騙した」「白華兄は結局は僕の嘘にだまされたのです」と書いて、実は自分はそんな立派な人間ではない、自分にはアンナという妻がおり、中国にも結婚している妻がいるという事実を「君に赤裸々に告白しましょう」と、アンナとの恋の顛末、結婚に至った経緯を話したすのである。そして、自分は「ついに彼女をダメにした!」「僕はまるっきり一つの罪悪の精髓です」と書き、こういう自分でも友人として認めてくれるのか、と問い、田漢の返事を「死刑の判決を待つ囚人」のような気持ちで待っていると書いて手紙を結んでいる。また、自分の六高時代の友人で、終生の友となる成仿吾を田漢に紹介し、彼と親交を結ぶよう勧めている。

2 通目は、2 月 18 日付け、田漢が郭沫若のこの率直な告白に感激する内容。田漢はの中で彼の人間観(自分はどういう人間を評価し、どういう人間と親交を結びたいか)を語っている。前便で自分の好きなのは「誠実な人」だと書いているが、この日の手紙で彼が展開するのは「人は善と悪の間で戦っている存在だ」という人間観である。悪に勝った者は君子=人間であり、負けた者は小人=禽獣だ、と彼は言う。人と禽獣を隔てるのは髪の毛 1 本ほどお差にすぎない。日夜悪と戦いこれを克服し、少しでも高みに上るよう努めることが出来るかどうかだ、というのが田漢の言うところである。そして彼はそれを成し遂げる鍵となるのは「懺悔」(田漢は confession[告白]という語を使っている)だという。彼自身が十分な説明をして

いないのでやや分かりかねるのだが、日夜悪と戦い高みに上ろうと努力する人間を、彼は「懺悔する人格」と呼ぶ。アウグスティヌス、トルストイ、ルソーこの三人は千古の人格者だが、その源には彼らの「懺悔録」がある、と田漢は言う。田漢は、その具体的な例として「自分の短所をあえて他人に知らせる」ことを挙げている。つまり、他人と付き合うときは自分のマイナス部分を隠し、人前で自分を飾り立てることをせず、プラスもマイナスも含めた自分の姿をまるごと曝け出す。それを受け入れてくれる者のみを友人と認めるというわけである。「誠実」な人というのはそういう意味であろうし、前述した「人格の公開」ということもそういう考えからきているであろう。このような考えから、田漢は郭沫若が自分とアンナとの関係を打ち明けてくれたことに感激したのだが、ここに展開されている人間観や友人観は、一面では中国社会的な儒教的な厳しい倫理観を受け継ぎつつ、その中からうまれた負の社会意識（例えば「面子」）を否定し、それと全く逆の人間になろうとする意識がみられる。

次に田漢が展開しているのは恋愛と結婚に対する考え方である。恋愛や結婚について語るとは、大正期、まさに郭沫若や田漢が暮らした1910年代～20年代の日本社会の流行でもあった。手紙の中で田漢が挙げている、青柳有美、平塚らいてうなどの人々や、彼らが健筆を振った『女の世界』、『青鞥』、『淑女画報』といった雑誌には、恋愛論、結婚論、女性解放論などの文章がたえず掲載されていたし、エレン・ケイのフェミニズム論もこの時期には紹介されていた。田漢の考え方はそれほどくっきりと展開されているわけではない。しかし、彼が数ある恋愛や結婚に関する文章の中から、郭沫若とアンナの結びつきを擁護する立場に立つものを紹介していることがうかがえる。

手紙の末尾には「どうぞしょっちゅう手紙を

ください」という文言がみられ、田漢が郭沫若と親交を結びたいという強い願いを持っていることがうかがえる。

この手紙に対し、郭沫若は2月25日に返信を書く（翻訳は「東海大学経営学部紀要第4号」（2016年度））19-22頁）その内容は、自分の手紙を読んだ田漢が、自分を拒絶する（原文は「死刑宣告」を下す）のではないかと心配だったが、受け入れてくれることがわかり嬉しい、という感謝である。そこには驚くほど率直に、郭の喜びがつつられている。返書は、有志を集めて「ゲーテ研究会」を作ろうというよびかけで終わっている。

第3通目は、お互いの紹介が終わり、すっかり打ち解けた仲になった田漢が、自分の研究テーマである「近代演劇」について、知識や意見を披瀝するものである。本号では、手紙の前半部分しか訳していないので、これについての詳しい解説は次号に譲りたいが、1920年当時東京で展開されていた日本の新劇運動についての見聞を綴った田漢のこの手紙は、中国話劇研究の重要な資料となっていることを書きとめておきたい。

『三葉集』全体から言えることだが、これらの手紙の内容から感得されるのは、郭沫若と田漢が当然のことながら日本の「大正文化」の圧倒的な影響下にその学生生活を送ったという事実である。そしてそれはとりわけ田漢において著しい。

田漢の手紙からは、当時のアジア地域における欧米文化の流入地として、アジアの文化的中心地たる東京に暮らす田漢の「知的余裕」のようなものが感じられる。彼が、無意識に、あるいは意識して書き連ねる人名や書名、自分が読んだ雑誌、見た演劇についての情報の背後に、一種の優越感が見え隠れするのを感じてしまうのである。例えば、ハウプトマン『沈鐘』、松井須磨子、島村抱月、ズー

デルマン『故郷』、シェイクスピア『ハムレット』『ヴェニスの商人』、チエホフ、**Realistic**、**Neo-Romantic**、**Modern Drama**、文芸協会、有楽座といった演劇関係の人名や術語は、それが東京での実際の（同時代の）観劇体験とともに語られることで、おそらく文学的教養がゲーテやシラーといった古典文学の範囲にとどまっていた、近代演劇の知識を欠いていた郭沫若には威嚇の語のように響いたのではあるまいか。

その一つの例証と思えるのが、第3通目の手紙への郭沫若の返書（3月6日付。翻訳は「東海大学経営学部紀要第4号」（2016年度）24-25頁）である。それまでの田漢の手紙に対する郭沫若の返書には、田漢に対抗しうるような同時代的な文化体験は語られていない。それが、6日付けの手紙に郭沫若は「昨日、有島武郎氏の「三部作」を買いました」と書き、内容を要約しながらその読後感を田漢に書き送っている。彼は書く。「描かれているのは、霊と肉との激戦、真と偽の競い合い、**Ideal**と**Reality**との衝突です。サムソンを霊的世界の表象とし、デリラを肉欲世界の表象としています」「サムソン—超人—の「力」の源泉はすなわち「誠実」です」こうした文章には、田漢の書信の影響が感じられる。郭沫若が田漢の知的威嚇に立ち向かい、彼と対等に知的な交流を行うためには、彼は大きくて自分に欠けている同時代の近代演劇の知識を補う必要があった。郭沫若が有島武郎の三部作を本屋で見かけ、購入したのは3月5日のこと、この本が出版されたのは前年12月である。彼は出版の直後にこの本を購入したことになる。それまで、同時代の日本文学に余り関心をもたなかった郭沫若が、本屋で見かけた有島の新作を買った理由の一つは、田漢の手紙に開陳されている、東京に暮らす年少の友人の文化体験への対抗心ではな

かったか、と思うのである。

その背景に存在したのは文化の中心たる東京と、地方の小都市に過ぎなかった福岡との、どうしようもない文化的格差である。そして、その地方都市で妻子を抱え官費の奨学金のみで一家の生活を支えなければならない貧乏医学生の実態である。仮に福岡にも東京と同じような映画や演劇といった華やかな文化が存在したとしても、郭沫若には、それを享受する経済的な余裕はなかったであろう。文面には表れていないものの郭沫若は田漢に対し羨望の念を抱いたのではなかろうか。

郭沫若が田漢の手紙の背後に見ていたものは、東京において擬似的に実現していた「近代」であつたろう。彼はそれをヨーロッパの文献を読み込むことで空想的に体験するほかなかった。私はヨーロッパの文学に強い関心を示す郭沫若が、同時代の日本文学に関心を示している痕跡が余りに少ないのに密かに不審を抱いているが、それは手近にありながら、手に入れることの出来ない東京の近代に対する反発の屈折した表現だったかもしれない。(2017年10月30日)